



TITLE:

京大広報 No. 577

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 577. 京大広報 2003, 577: 1421-1432

ISSUE DATE:

2003-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196526>

RIGHT:



# 京大広報

No. 577

2003. 3

## 目次

### 全学に訴える

- 法学部及び総合人間学部における  
差別落書きについて - .....1422

### 大学の動き

- 長尾総長の中華人民共和国訪問.....1423
- 部局長の再任.....1423
- 博士学位授与式.....1423
- 平成15年度入学者選抜学力試験の  
第1段階選抜状況.....1424

### 部局の動き

- 経済研究科が上海センター支所を開所.....1425
- 故若谷誠宏エネルギー科学  
研究科教授追悼式.....1425

### 寸言

- 複眼的思考 天野順介.....1426

### 随想

- 民主主義と国際法 名誉教授 安藤仁介.....1427

### 洛書

- 田中氏のノーベル賞受賞が与えた  
インパクトと示唆するもの 松重和美.....1428

- 訃報 .....1429

### 話題

- 放射性同位元素総合センター，  
京都市長から感謝状を授与.....1430
- 京大病院で『新春コンサート』を開催.....1431

### お知らせ

- 総合人間学部創立10周年記念  
公開シンポジウム.....1431

- 日誌 .....1432

- 編集後記 .....1432



上海センター支所開所式 - 関連記事 本文1425 ページ -

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 全学に訴える 法学部及び総合人間学部における差別落書きについて

京都大学同和・人権問題委員会

今年に入ってから3件の目に余る悪質な差別落書きが発見された。第一は、1月6日(月)法経本館1階西側男子トイレの個室の壁に、「×金正日 銃殺刑! ×朝鮮総連撲滅! ×反日朝鮮学校廃校!」と書かれたものである。第二は、2月6日(木)に総合人間学部A号館南棟3階男子トイレ個室内壁タイルに、特定の個人を「エタ非人!!」と差別し、誹謗中傷するとともに、「チョン・部落・知的障害者は死ね!!」と書き加えたものである。そして第三は、同じく2月6日(木)に京都織物跡運動施設管理棟男子トイレ個室に「バカチョンはくず 厄病神」と書かれたものである。

本学は、昨年以來、「京大広報」や告示、警告を通じ、差別落書きの非人間性、犯罪性を繰り返し指摘し、全構成員に対して部落差別や民族差別等、あらゆる差別問題に対する正しい認識を育むとともに、差別行為を見逃さず、その根絶に向けて一層の協力を求めて来た。それだけに、朝鮮人及び在日朝鮮人、被差別部落出身者、知的障害者を差別し、排除・抹殺を図ろうとする差別落書きが発見されたことに強い憤りを感じざるを得ない。本学としては、このような悪辣非道な差別行為を断じて許すわけには行かない。

なお、法学研究科長・法学部長名による1月7日付け「警告」-資料1-と、1月20日付け「告示第10号」-資料2-並びに総合人間学部長・人間・環境学研究科長名による2月7日付け「警告」-資料3-と、2月18日付け「告示第11号」-資料4-を併せ掲載することとする。

### 警 告

1月6日午後、法経本館一階西側男子便所で、民族差別の意識を露骨に表した落書きが発見された。「金正日 銃殺刑! 朝鮮総連撲滅! 反日朝鮮学校廃校!」というものである。

北朝鮮拉致事件が大きく報道されるなか、在日朝鮮人に対するいやがらせはあとを絶たない。こうしたなかで本学部構内でも民族差別を助長する悪質な事件が起きたことに怒りを禁じえない。匿名による言葉の暴力は、人々の心を深く傷つけるまことに卑劣な行為であり、断じて許すことができない。落書きの書き手に対し、強く反省を促すとともに、このような人道に反する行為を再び行わないよう、厳重に警告する。

2003年1月7日

大学院法学研究科長・法学部長

木村雅昭

### 資料1

### 警 告

2月6日(木)、総合人間学部A号館南棟3階西男子トイレにおいて、差別落書きが発見された。部落出身者を個人攻撃し、さらに「チョン・部落・知的障害者は死ね!!」という、悪質極まりないものである。総合人間学部構内で昨年2月から連続している差別落書きと同じ書き手によるものと考えられ、再びこのような落書きがなされたことに、憤りと悲しみを感ぜざるをえない。今回はさらに、「俺にこわいものはない。どうせ俺はダメ人間だ だか何をしやうと勝手だ」などと理屈にならない理屈が書き連ねてある。こわいものがないから、ダメ人間だから、弱い者いじめをする、というのは、単に臆病かつ卑劣なだけである。このようなつまらない腹いせは、即刻やめべきである。

また、学生および教職員においては、さまざまな差別が存在する現状を認識し、差別に加担することのないよう、自戒されたい。

2003年2月7日

総合人間学部長 宮本盛太郎

人間・環境学研究科長 江島義道

### 資料3

告示 第十号  
平成十五年一月六日(月)、法経本館一階西側男子トイレ個室の壁に黒のマジックで書かれた民族差別落書きが発見された。その内容は、「×金正日 銃殺刑! ×朝鮮総連撲滅! ×反日朝鮮学校廃校!」というものである。  
今日、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)による日本人拉致事件やNPT脱退・核開発問題等が世間の注目を集めるなか、在日朝鮮人への悪質ないやがらせが続いている。本学でも、昨年の十月に引き続き、在日朝鮮人に対する偏見を煽るような差別落書きが発見されたことに強い憤りを感じる。本学として、差別落書きの書き手に反省を促すとともに、教職員や学生諸君に対し、このような民族差別行為の根絶のために協力されることを強く要請するものである。

京 都 大 学

### 資料2

告示 第十一号  
平成十五年一月六日(木)、総合人間学部A号館南棟三階西男子トイレ個室内壁タイルに赤のサインペンで書かれた差別落書きが発見された。その内容は、特定の個人を指して「エタ非人!!」と書き加えたものである。さらに、同日、京都織物跡運動施設管理棟男子トイレ個室に同一人物と思われる差別落書きが発見された。それには、「バカチョンはくず 厄病神」と黒のマジックペンで書かれていた。  
本学としては、このような悪辣非道な差別落書きを断じて許すことはできない。これは被差別部落出身者や在日朝鮮人、知的障害者を差別し、排除しようとする犯罪的行為にはかならない。この差別落書きの書き手は、さらに、西にわたる警告や告示を行ったにもかかわらず、「俺にこわいものはない。どうせ俺はダメ人間だ だか何をしやうと勝手だ」と開き直り、何ら反省の色を見せる様子もない。  
しかし、本学は、この差別落書きの書き手に、真摯に、自らの行為の犯罪性に気づき、即刻その行為を止めるべきであると強く求める。教職員や学生諸君にあつても、あらゆる差別問題に対する認識を深めるとともに、かかる差別行為を見逃さず、その根絶に向けて格段の協力を要請する。

京 都 大 学

### 資料4

## 大学の動き

### 長尾総長の中華人民共和国訪問

長尾 真総長は、1月8日から12日まで中華人民共和国を訪問した。この間、復旦大学日本研究中心内に開設された京都大学大学院経済学研究科上海センター

支所の開所式に出席するとともに、浙江大学並びに杭州市人民政府を訪れ、教育研究に関する意見交換を行った。

### 部局長の再任

#### 遺伝子実験施設長

清水 章医学部附属病院教授（ヒトゲノム解析分野（分子生物学））が3月1日付けで遺伝子実験施設長に再任された。任期は平成17年2月28日まで。

### 博士学位授与式

1月23日（木）午前10時30分から、京大会館において、長尾 真総長、両副学長をはじめ、各研究科長出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に対し学位記（平成14年11月

25日付、同15年1月23日付）が手渡された後、総長の式辞があり、午前11時30分終了した。

各研究科別内訳は次のとおりである。



研 究 科	平成14年11月			平成15年1月		
	課程 博士	論文 博士	計	課程 博士	論文 博士	計
文 学 研 究 科	5	4	9	3	3	6
教 育 学 研 究 科	-	1	1	-	-	-
法 学 研 究 科	1	-	1	-	-	-
経 済 学 研 究 科	5	5	10	-	1	1
理 学 研 究 科	4	2	6	3	3	6
医 学 研 究 科	5	4	9	6	7	13
薬 学 研 究 科	-	1	1	-	3	3
工 学 研 究 科	6	3	9	5	17	22
農 学 研 究 科	4	11	15	2	11	13
人間・環境学研究科	2	-	2	2	-	2
エネルギー科学研究科	-	-	-	2	1	3
情 報 学 研 究 科	4	-	4	2	2	4
計	36	31	67	25	48	73

## 平成15年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜状況

平成15年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜が行われ、2月12日（水）、選抜結果が志願者に通知された。学部別の合格者数は次表のとおりである。

学 部	募集人員	志願者数	志願倍率	第1段階選抜		第1段階選抜 の予告倍率
				合格者数	倍 率	
総合人間学部	前期	110 <sup>人</sup>	468 <sup>人</sup>	451 <sup>人</sup>	4.1 <sup>倍</sup>	
	文系	55	234	229	4.2	(注1)
	理系	55	234	222	4.0	(注1)
	後期	20	380	320	16.0	約12.0倍
文学部	前期	190	592	592	3.1	約3.5倍
	後期	30	390	301	10.0	約5.0倍
教育学部	前期	40	138	138	3.5	約3.5倍
	後期	20	137	137	6.9	約5.0倍
法学部	前期	320	893	892	2.8	約3.5倍
	後期	20	388	340	17.0	約8.0倍
経済学部	前期	210	839	785	3.7	
	一般	160	534	534	3.3	約3.5倍
	論文	50	305	251	5.0	約5.0倍
	後期	20	560	560	28.0	約7.0倍
理学部	前期	271	956	927	3.4	(注1)
	後期	30	1,105	1,084	36.1	(注2)
医学部	前期	90	440	399	4.4	約4.0倍
	後期	10	196	149	14.9	約10.0倍
薬学部	前期	70	307	307	4.4	約3.5倍
	後期	10	201	201	20.1	約10.0倍
工学部	前期	857	2,184	2,182	2.5	約3.0倍
	後期	98	888	783	8.0	
	地球工学科	前期	166	401	2.4	
	後期	19	246	228	12.0	約12.0倍
	建築学科	前期	72	236	3.3	
	後期	8	95	65	8.1	
	A選抜	4	54	41	10.3	約10.0倍
	B選抜	4	41	24	6.0	約6.0倍
	物理工学科	前期	211	494	2.3	
	後期	24	190	190	7.9	約8.0倍
	電気電子工学科	前期	117	319	2.7	
	後期	13	103	78	6.0	約6.0倍
	情報学科	前期	81	196	2.4	
	後期	9	84	72	8.0	約8.0倍
	工業化学科	前期	210	537	2.6	
	後期	25	170	150	6.0	約6.0倍
農学部	前期	233	665	665	2.9	約3.5倍
	後期	67	818	818	12.2	
	資源生物科学科	後期	19	148	7.8	約10.0倍
	応用生命科学科	後期	9	106	11.8	約10.0倍
	地域環境工学科	後期	11	226	20.5	約10.0倍
	食料・環境経済学科	後期	9	106	11.8	約10.0倍
	森林科学科	後期	12	194	16.2	約10.0倍
	食品生物科学科	後期	7	38	5.4	約5.0倍
	合 計	2,716	12,545	4.6	12,031	4.4
	前期	2,391	7,482	3.1	7,338	3.1
	後期	325	5,063	15.6	4,693	14.4

(注1) 総合人間学部前期及び理学部前期は、大学入試センター試験の5教科6科目の合計得点が800点満点中550点以上の者を第1段階選抜合格者とする。

(注2) 理学部後期は、大学入試センター試験の3教科3科目の合計得点が500点満点中300点以上の者を第1段階選抜合格者とする。

備考 下記外国学校出身者のための選考の最終合格者が募集人員に満たない場合には、その不足数を法学部（後期）20名、経済学部（後期）20名の募集人員に加える。

## 〔外国学校出身者のための第1次選考実施状況（外数）〕

学部名	募集人員	志願者数(倍率)	第1次選考合格者(倍率)
法学部	20人以内	30人(1.5倍)	21人(1.1倍)
経済学部	10人以内	24人(2.4倍)	15人(1.5倍)



## 部局の動き

## 経済学研究科が上海センター支所を開所

経済学研究科は、昨年12月に同研究科内に現代中国と東アジア経済についての調査研究拠点として上海センターを設立した（2003.1 No.575参照）が、このたび中国上海の復旦大学日本研究中心の建物内に、同センターの支所を開設することになり、1月9日に復旦大学、上海総領事館及び本学の関係者が出席して開所式を挙行了した。

式典に先立ち、長尾 真総長が「京都大学の現状」と題して京大紹介をした後、下谷政弘経済学研究科

長が「日本経済と企業組織の発展」と題して講演を行った。

式典では、長尾総長の挨拶の後、王生洪復旦大学総長及び杉本信行上海総領事の祝辞に続き、復旦大学の教官や学生、京都大学の教職員が見守る中、両総長によって「京都大学上海研究中心」と書かれた上海センターの看板の開幕式が行われた。

続いて上海センター支所開所記念パーティが、両大学の関係者多数の出席を得て開催された。

上海センターは、経済学研究科内のセンターに加えてこの上海支所設置により現代中国経済等の調査研究体制を完備するとともに、今後は開かれたセンターとして本学の教官や学生が活用できるものと期待している。

今回の開所式については、中国の新聞やテレビにも取り上げられ、センター設立の意義について報道された。

（大学院経済学研究科）



## 故若谷誠宏エネルギー科学研究科教授追悼式

去る1月9日に逝去された若谷誠宏教授の追悼式が、エネルギー科学研究科主催により、2月17日（月）午前10時30分から12時まで工学部8号館大会議室において、約400人の参列を得て執り行われた。

式は、笠原三紀夫研究科長の挨拶に始まり、参列者全員による黙祷の後、長尾 真総長、飯吉厚夫中部大学長、院生代表武田和雄氏による追悼の詞、伊藤靖彦教授、西川恭治広島大学名誉教授による故人追憶、ご夫人の若谷康子氏の挨拶と続き、お子様方による弦楽四重奏の演奏が流れる中、最後に献花を行い、在りし日の若谷教授を偲んだ。

（大学院エネルギー科学研究科）



## 寸言

## 複眼的思考

天野 順介



1953年私は京都大学経済学部を卒業した。当時は敗戦直後の食糧危機こそ解消されていたが、政治も経済も混沌とした社会であった。大学自体も学制変更で、所謂新制大学が発足していた。私は旧制大学の最終として卒業したが、その年は新制大学第一期生とダブル卒業となり、就職問題も極めて深刻であった。就職先の選択も限られ、その後の経済社会の激動を考えると卒業生の夫々にとって運命的な選択となった。

1950年晴れて入学した大学は戦後処理の真只中で、新入生も海外引き揚げ者・軍関係学校出身者・既婚者と多様で、4～5才の年齢差は普通であった。

経済学を学ぶ者にとり、アダム・スミスの「国富論」はその原点であり、必読の書といわれている。経済学部に入學した私は先輩のアドバイスもあり、先ず「国富論」から勉強を始めることとし、一回生の夏休みをかけて図書館に通い、「国富論」研究に集中した。その年度の「国富論」は吉村達次講師（当時、後に教授）の外国経済書講座の担当であった。秋の前期試験にあたり私は一夏の勉強の結果、吉村先生はマルクス経済学者であることは承知していたが、敢えて近代経済学者の木村健康東大教授の所説を参考にして答案を提出した。ところが、経済学部初めての試験結果は60点。当時59点は落第点。何とした屈辱。私は再挑戦する決意で北白川の吉村邸を訪問、不名誉な試験結果の「引下げ」を御願した。先生は夜分にも関わらず招き入れ、丁寧に先生と私の思想の差・私の論理構成を評価した「真面目な」採点であることを説明され、更に今回の試験の総平均点が58点台であった秘事も漏され、切なる私の願いを退けられた。遺憾ながら手元に保存している経済学部成績採点票には「60」が厳然と記録されている。しかし、この事件(?)により私は社会科学の本質、思想・価値観の多様性、「複眼的思

考」、「アンティテーゼ」への寛容性、人間の評価等、その後の人生にとって重要な原則を学ぶことができた。京大入学最初に、この原則を学習したことを感謝している。この原則の学習効果を私は「60点主義」と称し、その後の社会問題・経営問題の重要な判断指針としてきた。一夏の図書館通いは万金の値となった。

21世紀は創造の時代、「知価社会」、激動の時代といわれている。創造とは、「零」から「一」を作りだすことである。2001年のノーベル化学賞受賞者野依良治さんはゲーテの言葉を引用して、「発明には知力が必要」で、「複眼的思考」と「感性」が大切と説かれている。また2002年ノーベル化学賞受賞者田中耕一さんは、「常識にとらわれない態度」が栄誉の源と話しておられる。激動の時代にあっては常識・過去の成功体験は「麻薬」となる可能性がある。凡人の業<sup>ごう</sup>というべきか。20世紀の負の遺産を清算し、21世紀に光あらしめんためには、常識の打破と「複眼的思考」の新しい知力が大切である。

昨今、大学研究機関の国際化が急速に進展している。米国MITはインターネットで講義内容を全世界に流し始めている。またアジア太平洋大学交流機構が設立され、優秀な学生の交流が促進されつつある。知的錬磨のチャンスは急速に増大している。2000年のノーベル経済学賞受賞者ジェームス・ヘックマン教授（シカゴ大）は「大学を（過去にこだわらない）知的な戦場にしなければならない」と説いている。最早、「日本」の京都大学ではありえない。21世紀社会の鍵である、新しい冷静さと柔軟性のある「複眼的思考」の知力の錬磨・開拓こそ京都大学に課せられた「歴史的役割」であろう。「世界」の京都大学へと発展あらんことを切望するものである。（あまの じゅんすけ 三菱電機<sup>(株)</sup>顧問 昭和28年経済学部卒）

## 随想

## 民主主義と国際法

名誉教授 安藤 仁介

比較的最近、「民主主義と国際法」というテーマがよく議論されるようになった。国際法は国家と国家の関係を、軍事力とか経済力とか、はたまた言語を含む文化の力とかによらず、すべての国家に共通のルールで規制することが



できないか、を問題としてきた。他方、民主主義は少なくともこれまで、一国家内部の政治・統治の原理にかかわる問題だ、と意識されてきた。その民主主義と国際法の関係が問題とされるようになったのは、二つの視点からである。その一つは、まさに国家対国家の関係における民主主義、言い換えれば国際社会の民主化という視点であり、もう一つは、すべての国家の統治原理として、民主主義が普遍性をもつべきだ、という視点である。

第一の視点は、実は伝統的な国際法、といっても17、18世紀以降のいわゆる近代国際法で問題とされてきた“国家平等の原則”につながるものである。この原則によれば、あらゆる国家は国土の広狭、人口の多寡、経済的な貧富、軍事的な強弱にかかわらず、平等かつ対等であるべきことになる。それはたとえば、国際会議で物事を決める際に、各国が対等な発言権をもつ形で表され、国際連合の総会ですべての加盟国がそれぞれ一票をもつのは、その一例である。だが考えてみれば、人口10億を超える中国やインドと、せいぜい一万程度の太平洋の島国とが、同じ一票をもつことは合理的だろうか。また、それぞれ国連総予算の二割を負担している米国や日本と、最低負担率の0.001パーセントしか出さない多くの途上国とが、ともに一票をもつことが妥当だろうか。国連の運営に影響を及ぼす声の大きさが、国名は避けるが、国人一人と中国人五万人とが同じというのは、どう考えてもおかしいし、組織の維持に必要な経費を日本の二万分の一しか支払わない国家が、その用途を決めるのに日本と同等の権利を持つのは無責任だ、といえないこともない。こうした問題は詰まるところ、あらゆる国家を等質で同じ重みを持つ

ものとして扱うために、生じるのである。

そのことはもう一つの視点、すなわち国連加盟国の国内的な統治原理が民主主義であるべきだ、という視点についても当てはまる。民主主義の本質は、リンカーンの有名な言葉“人民の、人民による、人民のための統治（government）”にあるとおり、およそ国家を治める行為が国民ないし被治者の意思に基づき（＝国民主権）、被治者の手により（＝代議制）、被治者のために（＝国民の福利）なされるべき点にある。しかし、スイスを加えて190に達した加盟国のなかで、民主主義が本質どおりに機能しているものがいくつあるだろうか。たしかに今日の国際社会では、どんな統治体制をとる国家も、統治の目的が国民の福利の実現にあることを正面から否定はしない。けれども、人民民主主義を標榜しながら、実態が軍事独裁政権に他ならない国家は、とくにアジア、アフリカの途上国に多い。また代議制を実のあるものとするためには、複数政党の存在、定期的な選挙、秘密投票制などが要求されるが、一党独裁や名だけの複数政党の存在する国家は少なくないし、憲法が定期選挙を謳っていてもそれが実施されない国家や、種々の方策により投票の秘密が保たれがたい国家もある。

そもそも国際法のねらいは、国家間の関係を共通のルールで規制することにより、国際社会の平和を維持することにあった。だが冷戦終結後の世界では、むしろ民族や宗教等の異質な要素を抱えた国家が内部的な対立・抗争を引き起こし、ひいては国際平和を脅かすケースが増えている。そして、こうした国内的な対立・抗争を解消するためには、まさに各国家の統治原理として民主主義が機能することが不可欠なのである。

従来の国際法は、国家の存在を絶対的な前提として、国家の内部に立ち入ることを意識的に避けてきた。最近における「民主主義と国際法」の議論は、国際法が今や国家内部の問題に否応無しに踏み込まざるをえない事実を反映しているのかも知れない。（あんど う にすけ 元法学研究科教授、平成10年退官、専門は国際法）



## 洛書

田中氏のノーベル賞受賞が与えた  
インパクトと示唆するもの

松重 和美

京都に本社がある島津製作所の田中耕一氏が2002年のノーベル化学賞を受賞したインパクトはいろんな意味で大きい。大学でなく企業の、しかも若い、国内外の学会でも無名の、学位を持たないサラリーマン研究者だったからである。我々、教官の大半は、独創的研究を行うには大学が最適であり、そうした能力を備えるには学位の取得は最低限の条件と認識し、学生にも大学院博士課程への進学を進めている傾向がある。更に、Nature や Science 等、その分野で著名な雑誌での論文掲載、専門家・学会での認知は必要不可欠で、よほどの大発見でない限り、受賞となるには相当の期間を要するとも。しかし、今回の田中氏の受賞はこうした常識からはずれ、多くの研究者、特に若手や企業研究者に、もしかすると自分にも受賞に値する研究が出来るかも知れないと言う、親近感、期待感、そして励ましを与えてくれたように思われる。受賞が決まったのマスコミの報道も、これまでの慶事としての取り扱いに加え、田中氏の率直な人柄に対し「癒し系」までの冠がつくこともあり、本当にいろんな層の国民に喜びと暖かさで迎えられている。

一方、我が国の科学技術という側面から検証すると、いくつか真剣に考え、またこれまでの方針を考え直さなければならない事項も多い。田中氏の先駆的発明はこれまで日本の学会、そして身近な会社内部でも十分な評価がなされず、むしろ海外でその価値が認識され、分析機器として実用化された経緯がある。また、田中氏は電気工学の卒業だが、タンパク質分析という異分野での仕事であったことも、こうした学際・融合の新領域での研究の進め方および研究者育成について真剣に検討することの重要性を示唆している。すなわち、日本には技術レベルが高く、独創性ある若手研究者が潜在的に多いという自信を得た反面、研究面における評価とその成果の実用化、新分野の取り組み体制という事項において、



今後改善する余地が大であるとの認識である。

ところで、研究を基礎、応用、開発と大きく三つに分類し、大学では基礎、そして応用の入り口までで、それ以降の開発は企業に任すべきとの考えがある。内容的にはそうかも知れないが、そうした棲み分けを単純に考えるのも問題がある。実際、最近の科学技術では基礎的発見が革新的技術・製品に結びつく事が多く、この三年間のノーベル化学賞の受賞内容を見ても、白川先生の高分子伝導体・有機バッテリー、野依先生の製薬・化学薬品、そして田中氏のゲノム・バイオ分析への応用と、時代が求める技術に対する先駆的基礎仕事という共通点がある。即ち、多種多様な研究業績の中で、世の中、人類が求める分野での革新的技術基盤であることが、ノーベル賞の一つの重要な選定基準となっていると考えられる。学問のための研究を決して否定するものではないが、現在の日本の大学の研究者の大半は大学だけの経歴しかなく、またその研究対象が学会という狭い世界に限定されている傾向が強く、もう少し世の中・人類の求める科学技術に目・意識を向けることが重要ではないかと反省させられる。これまで、産学連携を大学の技術シーズの企業への提供と一方的に捉える傾向があったが、今後は大学研究者が現実、社会の最前線での技術・学術課題を体得でき、重要な研究テーマを見つけだせる貴重な機会と認識すべきかも知れない。

ところで、田中氏には本学の国際融合創造センター( I I C )の客員教授に就任して頂いている。I I C は全学の産学連携研究の推進・支援センターとして、また独創的・融合的研究の遂行センターとして学内の有望で多様な研究者が集まっている。田中氏には、適当な時期に講演会をお願いすると共に、専門分野の医薬・工に限らず、いろんな分野の研究者と自由な情報交換の場を提供することで、学内研究者とともに先駆的研究の探索、実用化への展開等に活躍して頂きたいと希望している。

(まつしげ かずみ 国際融合創造センター長・工学研究科教授)

## 訃報

このたび、<sup>わかたにまさひろ</sup>若谷誠宏エネルギー科学研究科教授、<sup>こんどうしろう</sup>近藤四郎名誉教授、<sup>まえだけいさく</sup>前田敬作名誉教授が逝去されました。ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

## 若谷 誠宏 エネルギー科学研究科教授



若谷誠宏先生は、1月9日逝去された。享年57。

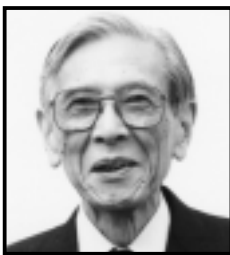
先生は、昭和43年京都大学工学部を卒業後、同大学院工学研究科修士課程を経て、同48年同博士課程を修了し京都大学工学博士の学位を授与された。昭和48年日本原子力研究所に就職され、プラズマ核融合の理論的研究を始められた。昭和51年名古屋大学プラズマ研究所助手、同53年京都大学ヘリオトロン核融合研究センター助教授、同60年同教授を経て、平成8年5月に新設された京都大学大学院エネルギー科学研究科の教授に就任された。この間、平成14年4月からは評議員を務められた。

先生は、ヘリカル系プラズマの理論的研究のリーダーとして大いに活躍され、エネルギー科学研究科ではプラズマ核融合の教育にも一層の力を注ぎ、『Plasma Physics』、『Stellarator and Heliotron Devices』などの著書を出版された。これらの著書は、世界の若手研究者にとって格好の教科書として高く評価されている。

また、大学評価・学位授与機構大学評価委員会評価員、内閣府原子力委員会核融合会議ITER/EDA技術部会主査、IAEA核融合エネルギー会議の組織委員など国内外の各種委員会委員を務められ、平成2年には、アメリカ物理学会のフェローに選出された。

(大学院エネルギー科学研究科)

## 近藤 四郎 名誉教授



近藤四郎先生は、2月6日逝去された。享年84。

先生は、昭和18年に東京帝国大学理学部人類学科を卒業後、同学部助手を経て、同35年同学部助教授となり、同42年京都大学霊長類研究所教授に就任し、同年から霊長類研究所の初代所長となり、以後同48年まで及び同50年から同53年までの間所長を務められた。昭和57年停年により退官され、名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和57年より平成3年まで大妻女子大学教授を、また昨年まで同大学理事を務められた。

先生は自然人類学、霊長類学の広い分野において研究されたが、生理学的手法(筋電図法等)の導入によりヒトの直立二足歩行に関する生機構学および

霊長類の姿勢とロコモーションとの比較研究は、同研究分野のフロンティアとして諸外国からも高く評価されるものである。なかでもライフワークの足の機能形態学研究が特筆される。また新世界ザルの系統発生解明を目指して数度の現地調査団を組織し、昭和54年度には中新世霊長類 *Stirtonia* 化石を発掘するなど、霊長類進化過程解明に著しい功績があった。これらのヒト化(Hominization)の過程究明に向けた研究業績は、従来の人類学に新しい学問領域を導入したものであるとして、その後の霊長類学の発展に顕著な影響を与えた。これら数々の業績により、昭和59年4月には紫綬褒章を受けられた。

また、財団法人自然環境研究センター理事(平成4年日本野生生物研究センターより改称、昭和53年から平成10年まで理事)、第5回国際霊長類学会大会組織委員長などを歴任された。

(霊長類研究所)

## 前田 敬作 名誉教授



前田敬作先生は、2月6日逝去された。享年81。

先生は、昭和19年東京帝国大学文学部を卒業後、兵役の後、関西大学予科講師、同助教授を経て、同25年京都大学助教授（教養部吉田分校勤務）に就任、同42年教授に昇任され、教養部においてドイツ語を担当されるとともに、文学部及び大学院文学研究科において、ドイツ文学の講義、演習を担当された。昭和60年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、摂南大学の教授を務められた。

先生のご専門は、近・現代のドイツ文学及び思想で、ゲーテ、カフカ、トーマス・マンなどの文学や思想の解明において数多くの優れた業績を残された。とりわけカフカの研究と翻訳、ドイツ表現主義の紹介、ゲーテなど近代ドイツ文学の古典、オヴィディウスの『転身物語』、キリスト教の聖人伝説を集大成したヴォラギネの『黄金伝説』など、ヨーロッパ文化史の基本的文献の翻訳紹介に大いに貢献された。先生の翻訳は、『ゲーテ全集』、『カフカ全集』、『ショーペンハウアー全集』など、全35巻に及ぶ。

また先生は、日本独文学会理事、日本ゲーテ協会理事として、長らくその運営にも尽力された。

（総合人間学部）

## 話題

## 放射性同位元素総合センター，京都市長から感謝状を授与

このたび、放射性同位元素総合センターが行ってきた京都市消防職員への放射線教育に対して、京都市長からの感謝状が授与されることになり、1月14日（火）、市役所内市長室において五十棲泰人放射性同位元素総合センター長に手渡された。

京都市には多くの放射線施設が設置され、また核燃料物質等が市内を通過して輸送されていることもあり、消防職員が緊急時に際しては迅速な対応が求められる。この消防職員の放射線に関する知識の向上を目的に、平成5年、同センターは京都市消防局からの依頼により、京都市消防学校特別教育（特殊災害対策課程）で消防職員に対する放射線教育を行ってきた。放射線の基礎と応用、放射線による影響などの講義と基礎的な放射線検出器を使った実習を組み合わせた2日コースのプログラムを作成し、毎年約30名の消防署員に対してセンター教職員が指



導している。

平成14年12月9日（月）、10日（火）に開催した教育訓練で10年が経過し、その功績に対して感謝状を授与されることとなった。

（放射性同位元素総合センター）



## 京大病院で『新春コンサート』を開催

京大病院では、1月21日（火）夕方、外来棟1階のアトリウムホールに特設ステージを設け「新春コンサート」を開催した。

嶋森好子看護部長の挨拶に始まり、本学学生サークルのアカペラバンドd o v eによる歌、病院や老



人ホームでチャリティーコンサート活動をされている岡本果奈さんによるフルート演奏（ピアノ伴奏：北尾雅子さん）、神戸大病院の青山伸郎助教授と本学医学研究科の高橋 玲助教授の共演による歌（テノール）とヴァイオリン演奏（ピアノ伴奏：豊永佳子さん）など多彩な出演者、盛り沢山のプログラムで実施した。

当日は、吹き抜けのアトリウムホール2階の立ち見も含め、入院患者さん、当日来院の外来患者さん約200人から盛んな拍手が送られていた。

このコンサートは、入院患者さんへ“憩いのひととき”を提供するため、平成7年から毎年、事務部・看護部による実行委員会が企画している手作りのイベントで、京大病院の恒例行事となっている。

（医学部附属病院）

## お知らせ

### 総合人間学部創立10周年記念 公開シンポジウム

総合人間学部は昨秋創立10周年を迎えました。これを記念し、下記のように公開シンポジウムを開催します。

#### 認知・計算・感情 総合人間学の可能性

1. 日 時 4月24日（木）午後1時30分～5時
2. 会 場 人間・環境学研究科 地下大講義室
3. プログラム

##### 総 長 挨 拶

「ものの見え方」・・・・・・ 船橋新太郎（教授）

「計算論的世界観」・・・・・・ 立木 秀樹（助教授）

休憩：弦楽四重奏（シュムー・カルテット）演奏

「感情は私のものか？」・・・・ 菅原 和孝（教授）

司会／コメンテーター・・・・・・ 篠原 資明（教授）

4. 定 員 150人（先着順）

5. 入 場 無 料（申込不要）

6. 問い合わせ先 総合人間学部 Tel.753-6504



## 日誌 2003.1.1 ~ 1.31

- |                          |                       |
|--------------------------|-----------------------|
| 1月6日 新年名刺交換会             | 18日 大学入試センター試験(19日まで) |
| 8日 総長, 中華人民共和国を訪問(12日まで) | 20日 学生部委員会            |
| 14日 評議会                  | 21日 附属図書館商議会          |
| " 大学院審議会                 | 23日 博士学位授与式           |
| " 教育研究振興財団助成事業検討委員会      | 28日 評議会               |
| 15日 国際交流委員会              | " 大学評価委員会             |
| 17日 同和・人権問題委員会           | 29日 環境保全委員会           |

## 編集後記

## 『京大広報』のあり方について旧編集部会からの提言

『京大広報』の読者と書き手は？ 『紅萌』(国内向け広報)や『楽友』(外国向け広報)と違って、『京大広報』は学内報であり、その読者の圧倒的多数は、京大構成員の教職員、学生です。一方、彼らへの発信ソースは、およそ4つ。 京大執行部から構成員に向けられた総長式辞、大学・部局の動き、栄誉・訃報等(《公報》欄)、 外の社会から京大に寄せられた期待や苦言(寸言欄)、 名誉教授から後輩に寄せられた所感や忠告(随想欄)、 現役教官から同じ京大の同僚や構成員に宛てた意見や提言(洛書欄)です。

『京大広報』の果たす役割は？ 見逃されがちですが、その本当に大切な役割は、読者である京大構成員の抱いている密かな関心や願望の在りかを探り当て、それを掘り起こして上げられるような記事を掲載して、学内対話を活発化させることです。そこで、上記 ~ の内容について、今後の編集部会に次のようなお願いをしたいと思います。

- 1) 執行部との対話を 発信ソース においては、毎回、執行部(総長、その他)に登場してもらい、京大を取巻くアクチュアルな問題や、それに対する執行部の考え方や方針について、インタビュー形式で語る対話欄を設けてもらいたいと思います。今後、執行部の方針について、構成員を説得してコンセンサスを得ることが、ますます大切になるからです。例えば現在のような、「総長が外国のどこそこに出かけた」という公報記事に、どれくらいの構成員が関心を持つでしょうか。読者が知りたいのはその中身であって、その事実ではないのです。
- 2) 学外からの眼差し 学外からの発信ソース については、基本的にテーマは投稿者の自由に任されますが、できれば編集部会から執筆者にいくつかのテーマを提示して、学内者の強い関心と呼ぶようなテーマについて意見を述べてくれるよう依頼してほしいと思います。『京大広報』には、学術的に《香り高い》エッセイなど要らないのです。
- 3) 若手をもっと舞台に 洛書欄は、肝腎の京大で学び、研究し、働く人々に執筆してもらおう欄ですから、スペースをこれまでよりも拡充して、若手研究者や若い職員に、どしどし意見や提言を述べてもらうよう働きかけてもらいたいと思います。また、院生・学生に座談会形式の記事に加わってもらい、若い意見を汲み上げることも望まれます。京大の将来はすべて、これらの若い人たちに掛かっているからです。
- 4) モニターとプロの導入 最後に、定期的な外部評価が必要でしょう。学内でモニターを募集して、広報の記事や編集について意見を聞いたり、学外の編集プロに頼んで意見を出してもらうなり、編集に参画してもらうなりすべきです。

以上が、この2年間、7月を除く毎月第3木曜午前10時半に集まって、『京大広報』の編集に携わった部会員から、次期部会の皆さんへの自己反省を込めた提言のバトンです。それでは最後に、この『広報』を時おりでも読んでくれた、不特定の心優しい読者の皆さん、さよなら。(旧部会員を代表して齊藤記)